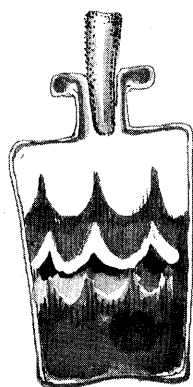


特集 〱 緑蔭 図書紹介 〱

『臨床の知とは何か』

中村雄二郎・著 岩波書店



友定 啓子

私がこの書物をおすすめするのは、幼児理解の方法や保育研究について根本的な示唆を与えられるからです。

哲学というと、ちょっと遠慮してしまいそうですが、この本は新書判という手ごろな分量で、しかも著者の数十年の軌跡をふまえて、素人と対等にわたりあってくれます。それは、素人にもわか

るように書いたという安易なものではなくて、  
「生活世界や生命的世界に着地するような哲学は、(日常の)言語にのっとった哲学でなければならぬ」という言語観に基づいているからです。

中村雄二郎といえは、ご承知のように「共通感覚論」「演劇的知」「パトスの知」など、一連の新

しい「知の可能性」を提唱してきた現代の超売れっ子哲学者です。私自身は、幼児の心性を理解するのに、これらのアプローチは有効だと思ってきました。大人の「合理的」思考とは違う思考回路を持つ異質なあるいは境界的存在としての幼児をどうとらえるかという試みを支援するものでもありました。

しかしそれをおもしろいとは思いながら、それでもまだ「合理的でないもの」を「合理的にとらえる」という呪縛から解放されてはいませんでした。「いづれ幼児は合理の世界に入る」という「発達観」のもとで、数字で説明してみたり、一義的な因果関係を求めたり、普遍性や客観性にこだわったり、そのために、多かれ少なかれ幼児や保育者自身の生命的世界を退けてきたと思えます。幼児の心に深くかわりながらも、学問や研究の科学的条件を満たすために、私たちは自分の

とらえた幼児の心やそれと交流する自分自身の心を語ることを潔しとしなかったのです。今回彼はこの書物のなかで、近代科学が無視してきたもの、それは「生命現象」と「関係の相互性」だとはっきり指摘しています。つまりそれは私たちが日々子どもたちとの間で繰り返していることは、「科学の知」だけではとらえきれないということの意味します。

著者はそれに対して「個々の場所や時間の中で、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流のなかで、事象を捉える方法」として「臨床の知」を提唱しています。私も子どもや保育に関する知識や理論が、目の前の個々の幼児や生活者としての自分自身を離れてどこか別に存在しているという幻想、または誰かが発見してくれるという期待をこころで棚上げにしてもいいような気がしています。

「実践とは、各人が身をもってする決断と選択を通して、隠された現実の諸相を引き出すことなのである。そのことによって、理論が現実からの挑戦を受けて鍛えられ、飛躍するのである」この意味で、実践が理論の源泉であると著者はいっています。そこで要求されることは、各人が子どもとの間で体験していること、あるいは実践していることを、自分の「ことば」で語ることだと思っています。「客観性」の中に逃げ込まず、理論の名のもとに表現を貧弱にしないことだろうと思います。したがって、それにふさわしい知の共有のしかたも開拓する必要があると思います。

またこの本は、おもしろい指摘がたくさんあります。たとえば「バトスの知」とは「受苦の知」という意味です。私はこれを、子どもと自分がかずれてしまって、しようがなくてあれこれ考え始めることと読みました。もう一つ、「知」とは個人的な形で存在することが基本であるということです。個人的であることを恥じることはないのだということです。読む人によってさまざまに発展していきます。読んでいくべき本です。

それにしても、「臨床の知」という命名は、それぞれの場で生きることばだと思っています。

(山口大学)

## 『江戸城の宮延政治』

熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状